

チームの鏡として率先

×歴史を刻め

マツゲン箕島硬式野球部



社会人野球
日本選手権

②

選手紹介

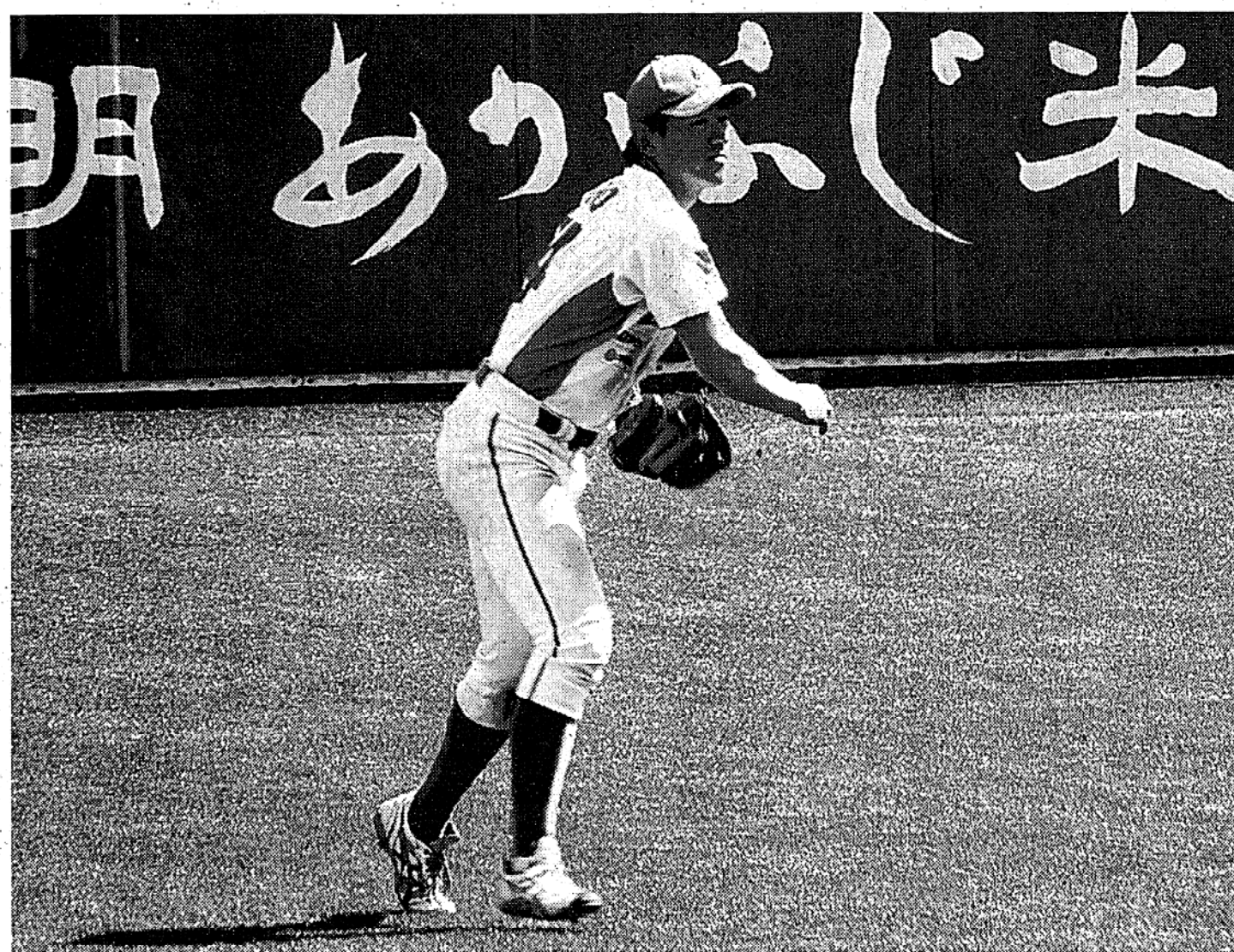
今春、入部3年目で西川忠宏監督に主将を任せられた。「この1年間は本当に濃くて長かった。精神的にしんどい面もあった」と振り返る。チームメートには年上がいる。何より自身が絶対的なレギュラーではなかった。主力メンバーへの遠慮もあって、最初はうまくチームをまとめられなかった。

新チームの最初の目標は都市対抗野球大会の優勝だった。しかし、和歌山・大阪1次予選の初戦

でミキハウスに七回コールド負け。「ベンチの雰囲気も悪く、チーム全員で戦えてなかった」、痛恨の敗戦で腹を決めた。「試合に出られない選手もいる。出場する選手は、そんな選手にも応援してもらえような態度で臨まなければいけない」。年上の選手やレギュラー選手であっても、気を抜いたプレーをした

り、チームにとってマイナスとなる発言をした時は、はっきりと注意した。自らもチームの鏡となる

矢野雅章主将(25)



ように、練習中から誰よりも声を出すなど、率先してチームを引っ張った。結果は少しずつ現れ、試合の時に一部の選

手だけ声を出していたのが、ベンチに入ったメンバー全員で声を出すようになった。得点を奪えば全員がガッツポーズで喜んだ。8月末の全日本クラブ選手権での優勝は「春先とは全く違う。出場している選手もベンチの選手もチーム一丸となって戦えた」と話す。

チームでは毎年秋ごろ、進退を決める面談がある。クラブ選手権で優勝できたことで、「選手として区切りをつける」と西川監督に伝えた。監督からはコーチとしてチームに残るよう打診された。「必要としてもらえるのはありがたい」。選手として最後に臨む社会人の日本選手権。「選手としての自分の力を全て出し切りたい」

練習試合で外野の守備につく矢野雅章主将

(マツゲン箕島硬式野球部提供)

【後藤奈緒】